令和5年2月号No.178

# 伊能忠敬と長崎測量

本会幹事　日宇孝良

伊能忠敬は、延享2年（1745）上総国山辺郡小関村(千葉県山武郡九十九里町)の名主小関五郎左衛門家に生まれた。宝暦12年（1762）忠敬17歳の時、佐原村(千葉県香取市)の伊能三郎右衛門家へ婿入りした。天明元年（1781）忠敬36歳の時、佐原村本宿組名主となった。

寛政6年（1794）忠敬49歳の時、隠居を認められ、家督を長男景敬に譲った。翌年、江戸に出て深川黒江町（東京都江東区）に住み、幕府の天文方高橋至時の門弟となった。

寛政12年（1800）忠敬55歳の時、蝦夷地と奥州街道を測量した（第1次測量）。また忠敬59歳の時、日本東半部沿岸地図を作成し幕府に上呈した。その出来が良く将軍家斉の上覧を賜り、幕臣に登用され、天文方を継いだ至時の長男景保の手附となった。以後、幕府の財政的・人的支援が強まった。文政元年（1818）江戸八丁堀（東京都中央区）の役宅で死没(行年73歳)するまで、全国各地の測量と日本地図の作成に力を注いだ。門弟たちは喪を秘して地図制作を続行、遺骸は源空寺(東京都台東区)の高橋至時の墓の横に葬り、爪と髪は菩提寺の観福寺（千葉県香取市）に葬った。

文政4年（1821）天文方の下役や門弟たちの協力により「大日本沿海輿地全図」が完成、同全図は、高橋景保の序文をつけて幕府に上呈されるとともに、忠敬の死没が公表された。

忠敬とその門弟は、第8次測量の一環として、文化9年(1812)から同10年(1813)にかけて長崎地方の測量を行った。忠敬が67歳から68歳の時である。忠敬の『測量日記』をもとにしてその要旨を記す。

伊能忠敬が止宿した大同庵跡の記念碑（長崎市炉粕町）

文化10年8月18日、長崎奉行所立山役所へこれまでの報告と挨拶に出かけた。時の長崎奉行は遠山左衛門尉で、その用人福田仁右衛門、手附豊田源治左衛門が応対した。

この日は、炉粕町の晧台寺(長崎市寺町)の末庵大同庵に止宿した。以後9月18日に長崎を出立するまで、一ヶ月間長崎市中と長崎半島を測量した。

そのうち、8月19日に測量を行ったコースと主な町や屋敷等は次のとおりである。

5つ時（午前8時）頃出立。長崎村→新大工町→伊勢町→南・北馬町→諏訪神社→松森神社→炉粕町→大井手町→勝山町→今博多町→長崎代官高木屋敷→桶屋町→今・中紺屋町→桜町→町年寄高嶋作兵衛屋敷→豊後町→本興善町→長州屋敷→堀町→大村町→町年寄高嶋四郎兵衛屋敷→長崎奉行所西役所→平戸町→椛島町→浦五島町→諫早屋敷→深堀屋敷→筑前屋敷→柳川屋敷→船津町→大黒町→恵美須町→島原屋敷→佐賀屋敷→平戸屋敷→下筑後町→本蓮寺→福済寺→上筑後町→観善寺→聖福寺→永昌寺→岩原屋敷→長崎奉行所立山役所等で、7つ時（午後4時）頃帰宿した。

出島に舶載された象を描いた長崎版画「象図」
（長崎歴史文化博物館収蔵）

なお9月1日には出島を訪れ、象を見た。この象はインド象でオランダ船が舶載したものだが、江戸に送られることなく、小麦百俵を給して送り返されたという。この時のオランダ商館長はヘンドリック・ドゥーフである。

9月18日長崎を出立、この日は時津村(長崎県西彼杵郡時津町)に止宿。19日は6つ半時（午前7時）、時津村を出立。20日は彼杵村(長崎県東彼杵郡東彼杵町)や佐賀領丹生川村(佐賀県嬉野市)を測量した。

引用資料：伊能忠敬著・佐久間達夫校訂『測量日記』 大空社（平成10年）
参考文献：渡辺一郎編著『伊能忠敬測量隊』 小学館（平成15年）

本稿は令和4年11月例会「伊能忠敬と長崎測量」の発表要旨である。